

# ベランダバードウォッチ 2017 年冬の報告 —17 年冬は冬鳥が少なかった？—

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木

今年もツバメが飛び交う季節となり、ついこの間まで厳しい寒さが続いていたのが嘘のようです。17 年冬は、北日本や日本海側では例年になく大雪で交通渋滞など様々な被害が報じられました。さらに、東日本でも厳しい寒さが続いた冬でした。このような冬は、住宅地周辺に生息する身近な鳥たちに何か影響があったのでしょうか。本報告では、おもに冬鳥の状況から、以下に 2017 年冬のベランダバードウォッチの調査結果を報告します。

## 調査状況

今冬は、北海道から九州までの合計 42 名の方によって、家での調査 27 か所、家の周りの調査 50 か所で調査されました。調査地数の経年的な傾向は、家での調査はやや減少したものの、家の周りの調査はこのところやや増加傾向にあります（図 1）。家の周りの調査地が多いのは、公園や河川敷など鳥の多い環境が含まれることで、家の調査より多様な種が記録され、調査を実施して楽しいためかもしれません。しかし、家の周りの調査地は増加している一方で、残念なことに調査回数が 1、2 回のところも多く、周年を通じた調査があまり増えていません。これは、家での調査より調査回数が多いために労力的に負担がかかるためでしょうか。家の周りの調査の単発的な調査結果は、季節的な変動の解析などから除かれています。できれば、調査地数を減らしてでもなるべく継続的に調査していただくと嬉しいです。

なお、今冬も調査地の地域区分では、北海道や東北でも調査が行われたものの、多くは関東以南の太平洋側

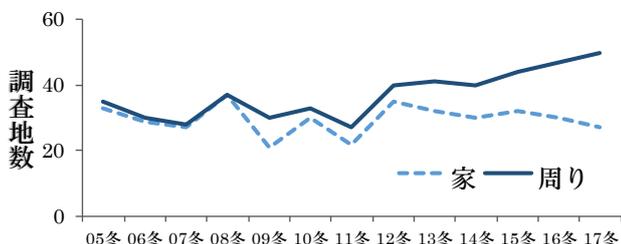


図 1. ベランダバードウォッチの調査地数の推移

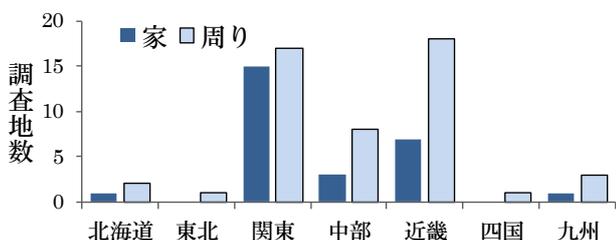


図 2. 地域区分別の調査地数

でした（図 2）。冬の季節は、北日本や日本海側の積雪の多い地域では、こうしたモニタリング調査は困難なのかもしれません。

## 記録種と記録率

付表に、2017 年 10 月から 2018 年 2 月末（家での調査は 12 月から）までに記録された種をまとめました。家での調査は 63 種、家の周りは 137 種、合計 140 種が記録されました。今冬も家の周りの調査で多くの種が記録されました。記録種をみると約 3 割を水辺や海辺の種が占めていました。ベランダバードウォッチは身近な鳥の調査ですが、場所によっては海辺や河川など様々な環境が入ってくることに改めて気づかされます。また、調査地に北海道も含まれることからオジロワシといったその地域に特徴的な種も記録されました。

## 身近な冬鳥からみた今冬の生息状況

住宅地周辺など身近な環境に生息する冬鳥のジョウビタキ、ツグミ、シロハラ、シメの記録率および記録個体数を、16 年冬や 15 年冬と比べてみました。

まず、2015 年から 2017 年冬の家での調査と家の周りの調査で得られた、上記 4 種の調査 1 回あたりの記録率を、3 シーズンで比較してみました（図 3）。すると、2017 年冬は、両調査とも 4 種すべてで記録率が過去 2 シーズンより低いことがわかりました。調査地は、

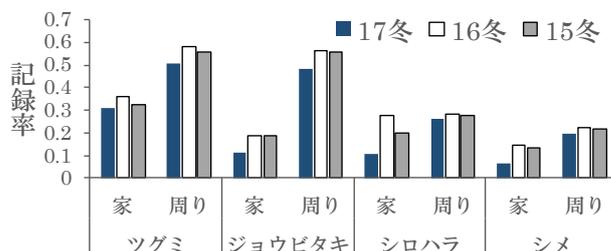


図 3. 身近な冬鳥 4 種の記録率の 3 シーズンの比較

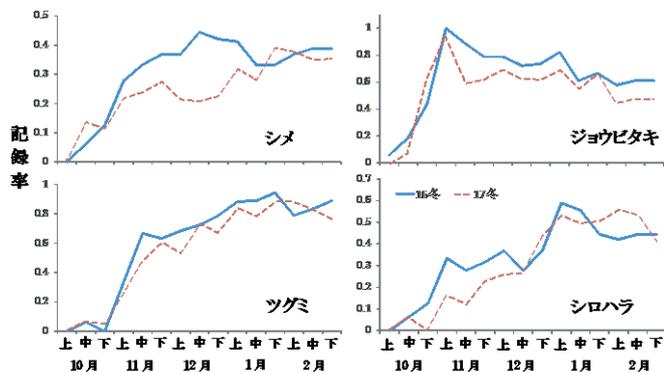


図 4. 家の周りの調査による冬鳥 4 種の記録率の季節変動

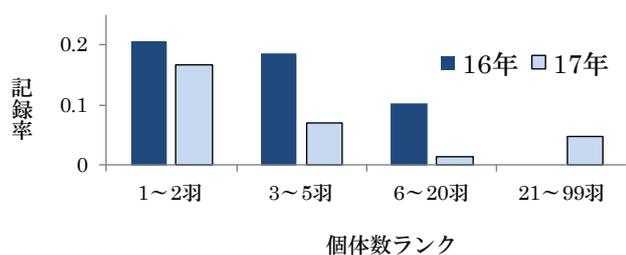


図 5. 関東地方におけるシメの個体数ランク別記録率の 16 年と 17 年の比較

調査年で重複しているものの多少異なっています。そこで、次に 2016 年冬と 2017 年冬と同じ調査地の家の周りの調査をもとに、4 種の記録率を比較してみました。特に、ここでは 10 日ごとの記録率の変動も両年で比較しました (図 4)。すると、17 年冬は、4 種とも全体的に 16 年冬より低い傾向があることがわかりました。特に、シメでは 11 月上旬から 1 月中旬にかけて、16 年より低いことが見て取れます。しかも、シロハラやジョウビタキ、シメでは、1 月下旬や 2 月上旬に記録率が一時的に高くなることもわかりました。

さらに、これら 4 種の冬鳥のうち群れで観察されることが多い、シメの個体数の記録状況を家の周りの調査の 16 年と 17 年で比較しました (図 5)。シメは後述するように関東地方が多いため、両年とも調査された関東地方の調査地の結果をもちいました。家の周りの調査では、個体数を概数で報告します。しかし、概数のうち「時々いる」は個体数の多少は考慮していませんので、「時々いる」を除いて解析しました。すると、17 年冬は個体数レベルでも 16 年冬より少ない傾向があることがわかりました。ただし、21~99 羽の大きな群れが 17 年冬には記録されました。しかし、この大きな群れが記録された調査地は、同じ地域の隣り合う調査地で、一部の地域を除けば、今冬はシメの記録個体数も少な

かったと言えそうです。

では、なぜ、今冬は冬鳥 4 種で記録率が低かったのでしょうか。今冬は北日本や日本海側が大雪のため、太平洋側では冬鳥が多かったのではないかと考えていましたが、結果は逆でした。その原因としては、今冬は山に食物となる木の実が多くベランダバードウォッチの調査地である市街地付近に出現しなかった、あるいは、繁殖地での気象条件などの影響で繁殖成績が悪く飛来数自体が少なかったなどが考えられます。前者については、今冬の山地や里地の森林の木の実の豊作のように見えませんでした。したがって植物の種子の豊凶ではこの低さを説明できそうにありません。繁殖成績については、種によって繁殖地が違うことを考えると可能性は低そうです。したがって、今冬の記録率の少なさの原因はよくわかりませんでした。なお、シロハラやジョウビタキ、シメでは、1 月下旬や 2 月上旬に記録率が上昇する傾向がありました。この時期は、寒波の影響で日本海側や北海道で降雪が続き、関東なども大雪が降りました。とすると、山地の林や北日本に留まっていた鳥たちが、積雪を避けるために関東以南へ移動してきたのかもしれない。

#### シメの地域的な飛来状況の違い

さて、冬鳥たちの記録状況を解析してみて興味深いことがわかりました。それは、シメの記録状況の地域的な偏りです。シメは日本へは本州以南へ冬鳥として飛来します。しかし、調査回数の多かった家の周りの調査地を、関東地方 (10 か所) と西日本 (9 か所) に分けてシメの調査 1 回あたりの記録率を解析すると、中部地方や近畿地方、四国・九州地方からはほとんど記録がありませんでした (図 6)。すなわち、中部地方以西では 17 年冬に 121 回調査してわずかに 2 回のみ、16 年冬では 122 回で 1 回のみ記録されただけでした。しかも、記録されたのはどちらの年も奈良県の同じ調査地

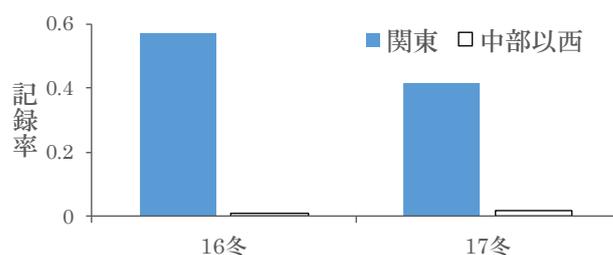


図 6. シメの関東と中部地方以西での記録率の比較



地上で採食するシメ（三木敏史）

でした。とすると、シメは関東など北日本で多く越冬するのかもしれませんが。ほかの3種ではそのような傾向は見られませんでした。ただ、ベランダバードウォッチは、市街地周辺の調査ですので、西日本ではシメの選好する環境での調査が少なかったことも考えられます。さらに、調査地数も関東や西日本で各10か所程度と少なめです。そのため、偶然による結果かもしれません。しかし、西日本にお住いの数人の会員の方にシメの生息状況を尋ねると、やはり少ないとのことでした。シメは、関東や東北などに多い冬鳥のようです。

## 最後に

以上のように、2017年冬は、ジョウビタキ、ツグミ、シロハラ、シメの冬鳥たちの記録率が2016年や2015年に比べて低いことが分かりました。さらにシメでは、個体数ランクでも少ないことも分かりました。こうした傾向は、皆さんのお住まいの地域でも同じ傾向だったのでしょうか。それとも違っていただけでしょうか。冬の調査では、繁殖期の調査より年による記録率や個体数に違いが現れる傾向があります。今回もデータを取りまとめ中に16年と17年で、あまりにも記録率に違いが見られたために、計算に誤りがあるのかと何度も計算しなおすほどでした。しかし、今回得られたような年による違いが、本当にその年の状況を表しているかどうかを明らかにするには、さらに多くの調査地のデータに基づく必要があります。調査地が少ないと、結果が一部の調査地の記録に影響を受け、正しい傾向が得られないからです。そのためにも、もっと多くの地域でベランダバードウォッチを行い、さらに継続して調査を続ける必要があります。

また、今回の調査では、シメの記録率に日本の東西で

違いがあることが示唆されました。関東に住んでいると、シメは身近な冬鳥です。しかし、西日本ではあまり多い鳥ではなさそうです。日本は南北に細長いこともあり、他にも身近な種で地域的に生息状況に違いがある種がいるのかもしれませんが。これらの点もベランダバードウォッチで明らかにできればと考えています。ぜひ、今後ともご参加いただければ嬉しい限りです。

なお、家の周りの調査の結果をWebページから入力していただく際に、お願いがあります。家の周りの調査は、記録した種の最多個体数を10日ごとに概数で入力します。データを拝見しますと、家での調査と同じように、調査日ごとに入力されている場合が見受けられました。調査日ごとの入力データは、解析の際に他のデータと一緒に解析できません。ぜひ、入力の際にはお間違いないようお願いいたします。

さて、この報告書がお手元に届くころには、繁殖期の調査が始まっていることと思います。昨年の繁殖期の調査では、ハシブトガラスがやや減少傾向にあることが、家での調査から分かってきました。はたして今年度の結果から、何か新しい傾向が分かるのでしょうか。引き続き、繁殖期の調査もよろしくご願ひいたします。末尾ながら以下に、17年冬の調査にご参加いただきました皆さまのご芳名を記してお礼にかえさせていただきます。

石口富實枝、石原渉、入船憲一、大出水幹男、大下怜莉、大塚啓子、沖田絵麻、加藤美奈子、川畑紘、久保田玲子、黒沢令子、小荷田行男、小林俊子、小堀脩男、齋藤映樹、佐々木勝、佐藤司、佐藤留美子、白石ひとみ、須田由美、大門明美・大門聖、高橋佳子、高山裕子、武居佳子、竹内敦子、武谷由紀子、辰巳文吾、田中利彦、長嶋宏之、西村章、丹羽和夫、平野敏明、藤原淳子、古川紀美子、松平晶子、三田長久、宮崎朋子、安田耕治、yolyama、吉川明宏、吉中康展、吉邨隆資、渡邊ケイコの各氏。

とりまとめ：平野敏明

付表. 記録種一覧

No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り
1	キジ	○	○	48	ユリカモメ	○		95	ヒレンジャク	○	
2	ヒシクイ	○		49	ウミネコ	○		96	ゴジュウカラ		○
3	マガン	○		50	セグロカモメ	○		97	ミソサザイ	○	
4	コハクチョウ	○		51	ミサゴ	○		98	ギンムクドリ	○	
5	オオハクチョウ	○		52	トビ	○	○	99	ムクドリ	○	○
6	オシドリ	○		53	オジロワシ	○		100	トラツグミ	○	
7	オカヨシガモ	○		54	ハイイロチュウヒ	○		101	マミチャジナイ	○	
8	ヨシガモ	○	○	55	ツミ	○	○	102	シロハラ	○	○
9	ヒドリガモ	○		56	ハイタカ	○	○	103	アカハラ	○	
10	アメリカヒドリ	○		57	オオタカ	○	○	104	ツグミ	○	○
11	マガモ	○	○	58	ノスリ	○		105	ノゴマ	○	
12	カルガモ	○	○	59	フクロウ	○		106	ルリビタキ	○	○
13	ハシビロガモ	○		60	カワセミ	○	○	107	ジョウビタキ	○	○
14	オナガガモ	○		61	ヤマセミ	○		108	ノビタキ	○	
15	トモエガモ	○		62	コゲラ	○	○	109	イソヒヨドリ	○	○
16	コガモ	○	○	63	アカゲラ	○	○	110	エゾビタキ	○	
17	ホシハジロ	○		64	アオゲラ	○	○	111	コサメビタキ	○	
18	キンクロハジロ	○	○	65	チョウゲンボウ	○		112	キビタキ	○	
19	ミコアイサ	○		66	コチョウゲンボウ	○		113	オジロビタキ	○	
20	カワアイサ	○		67	チゴハヤブサ	○		114	カヤクグリ		○
21	カイツブリ	○	○	68	ハヤブサ	○	○	115	スズメ	○	○
22	カンムリカイツブリ	○		69	モズ	○	○	116	キセキレイ	○	○
23	ミミカイツブリ	○		70	カケス	○	○	117	ハクセキレイ	○	○
24	キジバト	○	○	71	オナガ	○	○	118	セグロセキレイ	○	○
25	アオバト	○		72	カササギ	○		119	ビンズイ	○	
26	カワウ	○	○	73	ミヤマガラス		○	120	タヒバリ	○	
27	ゴイサギ	○		74	ハシボソガラス	○	○	121	アトリ	○	○
28	ササゴイ	○		75	ハシブトガラス	○	○	122	カワラヒワ	○	○
29	アオサギ	○	○	76	キクイタダキ	○		123	マヒワ	○	○
30	ダイサギ	○	○	77	ハシブトガラ	○		124	ベニマシコ	○	
31	コサギ	○	○	78	ヤマガラ	○	○	125	ウソ	○	○
32	クイナ	○		79	ヒガラ	○		126	シメ	○	○
33	ヒクイナ	○		80	シジュウカラ	○	○	127	イカル	○	○
34	バン	○		81	ヒバリ	○	○	128	ホオジロ	○	○
35	オオバン	○	○	82	ツバメ	○	○	129	ホオアカ	○	
36	ホトトギス	○		83	コシアカツバメ	○		130	カシラダカ	○	○
37	ヒメアマツバメ	○		84	イワツバメ	○		131	ミヤマホオジロ	○	
38	タゲリ	○		85	ヒヨドリ	○	○	132	アオジ	○	○
39	ケリ	○		86	ウグイス	○	○	133	クロジ	○	○
40	イカルチドリ	○		87	エナガ	○	○	134	オオジュリン	○	
41	コチドリ	○		88	オオムシクイ	○		135	コジュケイ	○	○
42	シロチドリ	○		89	メボソムシクイ	○		136	コブハクチョウ	○	
43	ヤマシギ	○		90	エゾムシクイ	○		137	ドンバト	○	○
44	アオシギ	○		91	センダイムシクイ	○		138	ホンセイインコ	○	○
45	タシギ	○		92	メジロ	○	○	139	ガビチョウ	○	○
46	クサシギ	○		93	セッカ	○		140	ソウシチョウ	○	
47	イソシギ	○		94	キレンジャク	○			合計種数	137	63